

# 韓国に帰還した海外養子たちのアイデンティティの模索と課題

—その内面葛藤と社会・歴史的な意識の交錯という点からのアプローチ—

生涯学習基盤経営コース 坂井 菜央美

The search for identity by South Korean overseas adoptees returning to their birth country:  
Focusing on the relationship between internal conflicts and the social and historical background

Naomi SAKAI

This research is a case study that examines the identity problems of adult South Korean overseas adoptees who have returned to their birth country. Interviews with five overseas adoptees were carried out, taking as a framework two aspects of the identity theory of E. H. Ericsson: 1) the mutual regulation between the historical perspective and the social and cultural background, and 2) the incorporation of the “perspective of others” into the “point of view of the self” of the subject. It can be concluded that contact with South Koreans, the experience of staying in South Korea, and reunion with their birth mothers prompted integration of these two perspectives among the overseas adoptees, and led to a transformation in identity and the search for a new way of life.

## 目次

はじめに

### 1. 海外養子のアイデンティティ問題に対する分析の枠組み

A アイデンティティの深化と社会的・歴史的な視点

B 「身体性」の視点

### 2. 「ルーツ探し（実親探し）」とアイデンティティの変容

### 3. 5人のインタビューを通して明らかにできたこと

A インタビューの目的と対象・方法

B インタビューの内容

#### 1. なぜ韓国か（訪韓理由）

#### 2. 韓国社会との出会いによる変容（韓国滞在の意味）

#### 3. 実母との出会い（「ルーツ探し」）による変容（再会の意味）

C インタビューの分析

おわりに

はじめに

「西洋で成長する間、海外養子たちは自分自身の本質的な部分を排斥するよう習ってきた。家族と友人たちにふさわしい存在になるために、私は韓国人である身体的特徴と個人史を拒絶した。西洋文化のレンズ

で世の中を見ようと学んできた。白人性を正常な標準、一般的な規範と見なすことを習い、その上自分自身の身体を含む全てのことを、標準から逸脱したものとする、このような教育を受けた<sup>1)</sup>。」

この文章は、海外養子として成長したある韓国人養子の心の葛藤を描き出したものである。成人して韓国に帰還した彼が、自己の成長過程を振り返りながら、韓国社会に対する批判を投げかけたものである。海外養子たちは、出生国の韓国とのかかわり方や距離の取り方においても多様性がみられるが、それでも共通して上述したような内面的な葛藤に苦悩する姿が想定される。筆者は、2006年にジェイン・チョン・トゥレンカの自叙伝『血の言語』に出会い、海外養子としての彼女の抑圧された内面を知り、衝撃を受けた。こうした海外養子たちが、韓国社会とどのように関わっていくのかという点に関心とさまざまな疑問を抱くようになった。本論文の問題意識もこの点にある。

海外養子問題は、ある面では韓国という社会や政治の特殊性や歴史性などと結びついて生みだされた現象である。そして韓国社会のさまざまに影響を与える社会慣習や民族、血統主義などの閉鎖性がこの問題を生み出した根底にあると考えられる。しかし一方で、彼ら・彼女らが社会や歴史から放置、無視された特殊な存在としてだけ見なすのではなく、韓国の社会や歴史に正当に位置づけられる有力な一員として認められて

いくことも今日では重要なことと思われる。その意味では韓国社会が彼ら・彼女らを韓国への生活適応を求める対象としてではなく、包摂、つまり正当な存在として見なしていくことが求められている<sup>2)</sup>。

2000年代に入り、海外養子らの韓国への帰還（一時・長期）が相次ぎ、今では年間500人余りに達する。増加するに従い、韓国が長年抱え込んできた弱者に対する抑圧の政治や制度、排他的であった民族主義、血統主義、ジェンダーバイアスなどへの問いかけとなり、多くの韓国人が持つ社会通念の再考を促す契機にもなっている。このような存在として海外養子を受け入れ、韓国社会と結びつける役割を担うのが、韓国国内で展開される海外養子のネットワーク活動や各種の訪韓プログラムや教育プログラムなどである。近年、このような海外養子たちに対する調査研究も多岐にわたり、海外ディアスポラとしての視点からの社会学研究、アイデンティティという心理葛藤問題の研究、海外養子文学研究、韓国への適応研究、そして訪韓プログラムの研究などがある<sup>3)</sup>。そうした研究のなかでも、海外養子たちが、韓国社会との接触によって生じる内面の葛藤については、筆者の知る範囲では十分な検討が行われているとはいえない。その理由は、アイデンティティ葛藤の問題は、臨床心理学的側面からのテーマと考えられたため、アイデンティティ問題が「自己」と「他者」との関係性において構築されるという視点が十分に盛り込まれなかったからだと考えられる。代表的な研究にコ・ヘヨンらの研究がある<sup>4)</sup>。心理社会的適応のための下位範疇として、「民族アイデンティティ」、「生の満足感」、「社会的孤立感」を分析枠組みとしている。この研究は三つの範疇の相関においてアイデンティティを分析したが、韓国社会の生活体験などとの関係における葛藤は十分に意識されていない。

本研究は、韓国での生活や実父母との再会という大きな出来事が、「他者」から「自己」への問題提起となり、「自己」がどのような変化をとげていくのか、事例を通して具体的に明らかにすることが課題である。つまり韓国語の氾濫、韓国人との接触体験、韓国社会の慣習や生活習慣への戸惑い、そして何より「ルーツ探し」という彼ら・彼女らにとって強烈な影響を及ぼす出来事があり、これらが海外養子たちのアイデンティティ問題や人生のあり方とどうかかわるのか検討することである。この点を明らかにすることによって、韓国社会が海外養子を包摂していく視点も見えてくるように考えるからである。

はじめに 1. では「海外養子たちのアイデンティ

ティ問題へのアプローチ」という視点から、エリクソンのアイデンティティを基盤にしたアイデンティティ形成と社会・歴史的視点、身体性と生について問題整理する。2. では海外養子たちにとって「ルーツ探し」がアイデンティティ葛藤とどのように関わり、いかに分析するかを論じる。3. は本論の中心部分であるが、韓国滞在の5人の海外養子たちへのインタビューを通じて、訪韓理由や韓国社会との接触、実父母再会の意味付けや自己変容の具体的な姿を分析したい。

## 1. 海外養子のアイデンティティ問題に対する分析の枠組み

### A アイデンティティの深化と社会的・歴史的な視点

吉原は、エリクソンの論を基にした杉村和美の「身近な他者との相互作用を通して自己と他者の視点が持つ喰いちがい矛盾を相互調整する作業」を引用し、青年期のアイデンティティ形成では、この「相互調整」が重要な役割を果たすと指摘する。この「相互調整」には、「自己と他者の視点の相対化」が必要であり、そこには自ずと「自己」には他者の視点を取り込んでいく過程が含まれるとした<sup>5)</sup>。

また「相互調整」を、アイデンティティの「調和形態」と表現した大倉は、ラカン(J.Lacan)の視角を取り入れていく。つまり、乳幼児期以来、他者となんとか折り合いをつけてきた「自」が、青年期に新たな「他者」的世界に参入することによって、〈他者との「言語的・観念的世界と格闘」〉という葛藤が生まれるという。なぜならば「他者的なものの鏡映機能によって主体は初めて『自』を構成することができるのであり、したがって他者的なものとの主体とある種の『調和形態』がアイデンティティと呼ばれるものである<sup>6)</sup>」という。「自」には、そもそも「他者的なもの」（言語、他者、社会・文化、歴史的状況など）が深く食い込んでいと説明している。

これらから海外養子問題の場合、アイデンティティは青年期の相互調整や「調和形態」が「他者」の視点を取り込む過程として説明できるが、それでも自己の境遇に関する「疑問」がつねに根底にあることは指摘されなければならない。そのため最終的には「ルーツ探し」（実親再会）によってしか、この相互調整や調和形態が図れないという側面も指摘できよう。海外養子たちが韓国に帰還する意味は、この点にあるように思われる。

そして歴史という、より大きな背景や視点を入れて

説明するのが西平である。西平は、エリクソン (E.H. Erikson) の〈発達〉と〈歴史〉をつなぐ論理を見いだす視点から、いかに歴史は個人の生育史を規定し、生育史はまた歴史を規定するのかという問題に触れ、エリクソンの「サイコヒストリー」を取り上げる<sup>7)</sup>。「ケースストーリー」(事例史)「ライフヒストリー」(生育史)「ヒストリー」(歴史)、これら3つの領域をエリクソンは「サイコヒストリー」と呼んだ。個人の自我形成にかかわる、個別的な個人の体験事例の「ケースストーリー」とその個人の人生を描き出す「ライフヒストリー」、それに彼らが生きた社会全般、その時代としての「ヒストリー」との相互規定性を見いだそうとした<sup>8)</sup>。西平はその上で「子どもの自我形成問題を社会や歴史段階と交錯する中に、静態的に探究するのではなく、むしろ、その社会それ自体を歴史的に移り変わるといふところに焦点を合わせながら、その両者を動いているままに捉えようとする。そこに歴史が変わることと子どもの自我の発達との相関関係という視点と問いが生じてくる」と述べる。結果的には、アイデンティティ研究は、「時代の転換期にある歴史的な事件を扱う歴史学」に基盤を置いて、変動する歴史の一コマにおける個人の移り変わる生育史を探り出すというエリクソンの手法を取り上げ指摘している<sup>9)</sup>。

以上の青年期以降の段階における海外養子たちのアイデンティティの葛藤問題を考えたとき、海外養子たちの韓国訪問という決断が、やがては海外養子制度という歴史、社会問題に結合していく流れを西平の主張から見いだすことができるように思われる<sup>10)</sup>。

## B 「身体性」の視点

もう一つの論点と考えられる。アイデンティティを歴史や社会と関連させて考えるということは、海外養子たちの全人生の意味を、歴史や社会と関連させて意味づけたり、把握することであろう。細見は「身体性」という視点から、アイデンティティとは「同一性」という意味であって、必ずしも人間の心理的主体や「自我」にそくした問題だけとは限らないとし、「同一性」身体や生(人生・生命)まで含めた一体的感覚のことである、と説明する<sup>11)</sup>。「身体性」まで含めた一体的感覚は、私たちのアイデンティティは、他の個体、他のクラス(集団)との関係を抜きにしては迫れない(他者性)の側面と、「心理」や「自我」だけがアイデンティティではない身体あるいは生命という側面を重視するという。細見の視点は、アイデンティティ問題を、より人文・社会科学領域の問題と見なし、そのため

に「身体という受動性 人間は一個の身体として、あるいは生命体として存在している」こと、「身体ないし生命としての私を維持するためには、いつも外部から『他者』を取り込まなければならない」ものと見なすのである<sup>12)</sup>。「ぼくらはひとつの身体的存在として、そのような他者の同化および他者への同化という一見奇妙な事態を、日々生きているのだ。身体的存在として、自らの内部を未知の不確定な『外部』へとつねにすでに開いてしまっているのである<sup>13)</sup>。」(下線一筆者)としている。ここからは同一性の視点に含まれる身体性という点から問題をとらえることができる。

以上のように、アイデンティティは社会・歴史と関連して形成されると思われる。その際、身体や生命を視点にいれアイデンティティの問題を考えていきたい。

## 2. 「ルーツ探し(実親探し)」とアイデンティティの変容

海外養子たちのアイデンティティの葛藤の中心課題は、「実母との再会」である。その「ルーツ探し」は、自己の存在自体に対する疑問から生じる傾向がある。例えば、スウェーデンのビルギッタ・ブレドベリは、韓国から養子として1969年に当時3-4歳のジンを受け入れたが、この養子のジンは20歳ごろにアイデンティティの葛藤に苦しみ、精神的危機に陥るようになった。数年後、心の平穏を取り戻した彼は次のように回想している。「わたしは悩み、背けて、我慢してきたあらゆる感情を、自由に開放する勇気を得て、他の人とこの問題について話を交わすことができました。私は誰でしょうか？私の実親は誰で、なぜ彼らは私を捨てたのでしょうか？これはまさにアイデンティティの危機でした。」「私が捨てられた存在という事実が与える寂しさは、言葉で言い表せないものだ。」と語る<sup>14)</sup>。海外養子たちにとって、「実母との再会」がアイデンティティのあり方に影響する極めて重要な出来事といえる<sup>15)</sup>。

野辺陽子は、日本の国内養子の分析枠組みに関連して、青年期に養子たちが養子の事実を知り、「私はなにもものなのか」という感覚を抱く時、「そこでは自明なりアリティとアイデンティティを保障してきた意味世界が崩壊したことを意味する」と考えている。ここでいう崩壊する意味世界については、二つのレベルを指摘する。「つじつまのあった」因果関係に関わる「認知的な意味世界」と、善悪や望ましさに関わる「規範的な意味世界」である。前者は、親が自分を手放した

ことの合理的説明にあたり、後者は、それでも親としてのあるべき姿としての規範的な見方である<sup>16)</sup>。この両者の意味世界を当事者なりに調整、納得してこそ、アイデンティティの安定につながると考える。海外養子の場合、国内養子とは背景や状況が異なるが、それでも野辺の指摘する「意味世界」の2つのレベルに向き合う姿が想定され、そのことが訪韓の動機となると思われる。具体的な分析視点として考えていきたい。

そこで次に、韓国に帰還ないし長期滞在を実現した海外養子たちへのインタビューの結果を示していきたい。以下、具体的にその心的変化を検討したいと思う。

### 3. 5人のインタビューを通して明らかにできたこと

#### A インタビューの目的と対象・方法

筆者は、5人の帰還している海外養子たちに2回ずつのインタビューを実施した（第1回目は2010年8月30日－9月1日、第2回目が2011年3月23日－24日）。

**（質問・分析項目）**

- ①訪韓理由
- ②韓国社会と接触（韓国滞在の意味）  
（圧迫感をもった体験）（肯定観）（変容）
- ③ルーツ探し（実母探し）その衝撃

1回目と2回目の変化を知りたいと考えたからである。インタビューの時間は、一人当たり90分程度ずつ実施し、その際の使用言語は韓国語と英語のいずれかで、ときには通訳を介して行った。5人とも韓国滞在期間や訪韓回数も異なっている<sup>17)</sup>。

インタビューによって、養子たちの韓国への関心の程度や滞在経験が、韓国との距離感や自分意識に対してどのような影響を及ぼしているのかを探ろうとした。

「ルーツ探し」（実父母、実家族）の目的やそのことの実現した意味（そのことの意味の変化）、外国に追いやった韓国政府・社会への懐疑と変革の意識などについてである。

インタビュー分析の課題について触れておきたい。アイデンティティの問題をいわば「他者」としての「韓国社会との接触」（上記②）、「ルーツ探し」（③）という事件や、韓国に帰還することによる「アイデンティティの変容」（①②③）という変化に絞り示した。そして「身体性」、「生」という全身的で、人生の歩みに関わる葛藤と安定を求める視点で分析する。そのことが、また韓国現代史という歴史的・社会的な背景と自己のアイデンティティの問題とをいかに関係づけていくのかという本人たちの個々の課題があり、その点も検討したい。さらにその過程において「認知的な意味世界」と「規範的な意味世界」の両面にどのように向き合ったかも触れたいと思う。

インタビューイAは、デンマークから来ている明るい青年という感じ。Bは、アメリカのミネソタ州の田舎育ちで米国での職業を退職して韓国に滞在している。韓国語を話し、現在海外養子問題の解決に取り組んでいる。Cは、割と年齢が高く、深い知識と幅広い観点で発言する。やはり海外養子問題に関心が高く、社会福祉を大学で学んでいる。Dは、スイス育ちで、控えめな感じの女性。スイスで看護師をしている。はじめの1年間の韓国滞在経験である。Eは、厳格な宗教家の家庭で育ったというフランス人女性で、フランス的な個人主義の発想が強い。韓国美術や伝統工芸などの文化に興味を抱いている。韓国語を話す。

#### B インタビューの内容

##### 1. なぜ韓国か（訪韓理由）

Aは「最初は好奇心、韓国はどんなところなのか、

**【表1】5人のインタビューイについて**

	国籍（成育国）	世代・性別	養子となった月・年齢	ルーツ探し
A	デンマーク	30代・男	9か月	実母はすでに死亡。2007年に親戚と再会する。不明の実父を探したいという。
B	アメリカ	30代・女	6か月	1995年に実母と再会を果たす。以後、頻繁に訪韓、現在は韓国の大学院で学ぶ。
C	スイス	40歳・男	6歳6か月	1995年に実母と再会、以後、たびたび訪韓。現在は韓国の大学で社会福祉を学ぶ。
D	スイス	30代・女	3か月	2005年に実母と再会。現在は韓国に1年間滞在。スイスで看護師。
E	フランス	30歳・女	6か月	2007年に実母に再開。韓国語が流暢で、韓国文化にとっても興味を抱く。

興味津々な挑戦」と語る。Aらしく好奇心を第一に挙げている。このなかには「ルーツ探し」も含意されている。Bは1995年に果たした実母との再会が契機となり、その後たびたび訪韓し長期滞在（定住志向）を試みている。Cは「YWCAの訪韓プログラム参加により、実母にも再会し、韓国に強く関心を抱くようになった」とし、長く韓国生活してみたいとも語った。Dは「私が死ぬ前には、韓国にいてみたいと思いました。」「最初は、私がどんな所から来たのか韓国という国に関して関心がありました。…実父母がなくなる前に、1度あってみたいと思いました。」という。Eは、「韓国に行くのは大事なことだったし、実母を探ることが目的だった。」と明言する。これら5人が共通して訪韓理由に、「ルーツ探し」をあげている。実際、全員実母や家族との再会を果たすが、その後、韓国がより身近な環境となり、各人生にとって韓国は欠くことのできない生活環境に転じていった。しかし実親との再会が、全ての養子たちが抵抗なく韓国を身近なものと感じるとは限らない。再会によって自己の人生にとって納得（「認知的な意味世界」と「規範的な意味世界」の両面において）が得られなければ、韓国社会は単に抑圧的なものと見なされるし、アイデンティティの混乱も深まる危険性がある。

さて「ルーツ探し」という実際の行動は、一つは実母がなぜ自分を手放したのか、実父母側の行為の合理的説明と認知的な意味世界によって、自己の人生（出発点）の「正当化」が図れたのかという問題である。この点は後ほど触れたいと思う。

## 2. 韓国社会との出会いによる変容（韓国滞在の意味）

つぎに訪韓し、韓国社会と出会うことで、韓国的一般社会の特質や文化のなかでの葛藤や韓国人との交流、他の海外養子たちとの出会いを通じて、彼ら・彼女らはどのように自己の人生の意味付けやアイデンティティを確認、更新したり、また反対に混乱の契機としたのか、いわば自分認識に対する影響を与える外的要因としての「韓国社会」を検討してみたい。具体的には韓国人との接触体験、韓国社会固有の規範との葛藤、海外養子に対する韓国社会の受容と評価、実母との再会体験と自己の境遇の意味づけなどである。

### ①（圧迫感をもった体験）

Aは、「デンマークでは、道を歩く時、外見が違うことから感じる違和感があったけれど、ここ韓国で

は、デンマークのような外見の差はないけれど、受けるストレスは一緒だ。ここ韓国では、韓国人の顔をしているのに（外見は韓国人なのに）、何で韓国語ができないのかと聞かれるので、いちいち説明しないとイケない。」と韓国語会話を巡る日常的なストレスを語っている。こうした言葉のストレスは、想像以上に大きいと思われる。Cは「韓国語の試験で点数がよくなかったので、韓国語教室の上のクラスに上がれませんでした。」、Dも韓国に来て、「道を歩いていると、自分にいろいろ尋ねてくるけど韓国語ができないから不便だった」など、その大変さ不便さに触れている。

また社会の問題性という点から、Bは、「アメリカでは人種差別がいやで出てきて韓国に来たのに、韓国では性差別主義があって、どこへ逃げればいいのかわからない。」と人種とジェンダーとの二重の苦痛を指摘した。興味深い指摘でもある。Eも韓国という社会は、「お金がなければフランス社会より、もっと暴力的だと思う。」と指摘し、外側から見た韓国社会の格差の現実と福祉国家としての遅れ、それを「暴力的」と表現した。それでもEはBと微妙に発言が異なり、「これも韓国社会です」とその矛盾の現実を受け止めている。Eは関連して、次のように発言しているからである。韓国女性が道ばたで自由にタバコを吸っているのを見て、その自由さに驚いたと述べたが、それは既にフランスではそのようなことはもっと自由であるが、ここ韓国ではもっと保守的な雰囲気と知っていたので、韓国の社会の変化について驚いたから、と説明している。旧い社会の見方ではなく、社会の成長や変化についても期待するところに韓国社会と自分とのかかわりを見ようとしている。

自分たち養子に対しての韓国人の接し方については、Bは、「それについては、韓国人は典型的な反応を見せることは予想可能になりました。まずは、英語の発音のことを言われ、次は、海外養子であることがわかると、関心を示しながら、『お母さん見つかったか』と聞いてくるし、三つ目は、『どこで育ったのか』と聞いてきます。とても面白いです。」と韓国人のパターン化された反応に対して、やや冷やかにその問題性を指摘している。ここには韓国社会の排外性という問題意識を欠落させた同情心だけで関わってくる韓国人一般の姿を疑問視する見方があった。同じくCは、「やっぱり、韓国人と出会った初めから養子であることについて、すぐに言えないのです。ある人は、あんまり良い反応を見せなくても、今は気にならなくなった。」と語り、一部の韓国人における養子に対す

るマイナスイメージを感じ取り、韓国人の無理解に戸惑う時期もあったという。Dも、国内養子家庭の家族に沢山の質問を受けたとき、質問に対して、どのように話したらよいか困っている。どこまで話したらいいのか、どこまで隠すべきか、葛藤があった、という。海外養子であることが最初から明らかなこと（外見から）、育った環境に違いがあることを理解していないので、質問は検討違いのことが多かったという。こうした語りは、彼ら・彼女らが直接に体験した韓国人や韓国社会の排外意識を感じる場面でもある。

以上の海外養子に対する韓国人の対応などの韓国体験に対して、次のような発言がある。C「3年間暮らしてみても、韓国人と西洋人である自分との考え方があまりにも違うのを感じた。それで、韓国の社会に、溶け込めそうもないので、いずれは帰ると思う。」というものである。養子に対する接点だけではなく、個人主義の発想の強い欧米と集団意識が強い韓国人との感覚の差異であろうか。同じくDも当初、「韓国に永遠に暮らすことは考えていない。」と明確に回答していた。言葉の問題だけではなく、養子としての存在、個人が尊重される西欧文化のなかで成長した自己との葛藤がストレスとなっていく様子が見られるのである。

以上、韓国人との接触や韓国社会のもとでのストレスとを感じる事例を取りあげた。これらのストレスに向き合い、折り合いをつけようとする彼ら・彼女らは、反対に安定をもたらす韓国人や韓国社会の肯定的な面を、どのように見ているのであろうか。

## ②（肯定観）

訪韓について、いずれは帰国すると語っていたCは、「そんな不安な感じはなかったし、何も知らなかったから。すべてが新しい発見だった。」。不安を抱えながらも、韓国という未知の世界に対する好奇心を5人それぞれが抱くことは間違いない。そしてこう語ったCも2回目のインタビューで「もう少し長期に韓国に滞在して自分のこと海外養子のことを考えたいと、気持ちの変化も生じてきた」と語る。個人主義の感性の強いAは、「儒教的伝統が強い人もいるけど、品位がある人もいるので、人それぞれ違うので一般化はできない。」と言い、私たちの韓国社会はこうである、という民族とか国家にこだわる固定観念やステレオタイプの見方に疑問を示している。また韓国で暮らすことによって自覚しなかったことや両親（養親）の大事さが認識できたともいう。Eの場合も「韓国人に関心がある。外に出て、地下鉄に乗って、韓国人の顔を見て、この人

はどんな人なのかな、どうやって生きてきたのかな、よくわからないけれど…韓国旅行に行ったら、韓国人とふれあいながら、韓国人のことをよくわかるような気がする。」と韓国人との出会いに強い興味・関心を持つと共に、「韓国に来てからは、積極的になったと思います。」と語る。こうした個々の韓国人との交わりに一定の関心を持てれば、民族とか国家という枠組みを相対的に緩めていくものと考えられる。Dも、予想していた以上に近代化された韓国と伝統に魅力を感じている。

つまり国家間や民族間という問題意識で海外養子である自分を位置づけるのではなく、あくまでも個人の問題と考える傾向を見いだせる。また全般に、韓国生活が「未知」の段階の好奇心から「体験」の累積による興味関心、新しい生活の可能性の実感など、肯定的な体験が基礎になり、5人の複数回の滞在となっているのであろう。このことは新たな韓国との付き合い方を深めるということでもある。

## 3. 実母との出会い（「ルーツ探し」）による変容（再会の意味）

「ルーツ探し」は大変な試練でもある。Aの場合は、すでに実母は他界し、生存する叔母からは父親は探さない方がよいとの忠告を受け、それでも彼は実父を探すという。叔母たちとの再会に対して、Aは再会のための心の準備をし、Bは、「養父母は反対の気持ちはありながらも再会した」、Cは、(10日で見つかったので)「僕は、その時まだ心の準備が出来なくて」「僕は、昔の韓国でのことは何も覚えていない状態だったので、その人に会う時、本当のお母さんかどうかよくわからないし、知らない人のように感じた。会うのを重ねながら、それでも自分のことを思い出せなくて」と、6歳までの韓国での記憶を必死に思い出そうとする姿があった。Dは、「最初は何も感じなかった。何の期待もなかった。イエス。今思えば肯定的なことだけど、最初はこの人たちは一体誰なのだろう、という感じでした。」と再会の様子が淡々と語られた。それでもEは、「表現するのは難しいですね。私の人生において、初めて感じる感情でしたし、想像だけして実際にその姿を目にしてとても感情的になりました。」との感動を語っている。それぞれの反応の違いがあらわながらも、5人は再会後も関係を継続させ、連絡や再会を繰り返している。実母との関係が、断絶ではなく継続しているところに再会の意味が考えられる。自

分を手放した実親に対するその行為への共感や同情の気持ち、さらにはそれらを前提とした許しの感情が存在するのであろう。

実母と再会しその後の心の変化を切々と語るのとはBであった。Bは「その理由は、韓国の実母が病気になったので。二回目の韓国の訪問は、実母が心臓病で。三回目は、脳腫瘍の時、韓国から危篤の電話が来たので、三回目は、お姉さんと一緒に訪問した。そうしているうちに、だんだん心の変化があったみたいで、私たちとお母さんの関係は変化し続けていた。韓国の社会に暮らしながら、少しずつお母さん（実母）のことが理解できた。」という。養子となった理由は、「韓国の実母には、娘だけ5人で、息子がいなかったから、だから私とお姉さんが、アメリカに養子で送られたんです。養子に出される理由は、そうだったのです。韓国では、女性の役割が妻と母でないと、その人が何者かもわかりません。…家父長的な社会で、その被害に遭われた人が、例えば、未婚母の人々や…」と言い、韓国社会では、男性は女性より社会的な力をつけないといけな思われています、と語る。ここには、実母がジェンダーと家父長的な家族関係の被害者として描き出されているのである。その結果、自己の境遇も社会的な犠牲者としての側面を内包させるのである。

同様の意味付けは、Cの場合も「実は韓国のお母さんから聞いたんですがその当時、貧しかったし、実は、お姉さんと僕を海外に送ったのは、おばあちゃんだったんです。実のお父さんが亡くなって、おばあちゃんはこの嫁は子ども達をきちんと育てられないとお母さんを追い出しお母さんから僕たち3人の兄弟をとりあげ、お母さんの許可なしで、長男であるお兄さんだけ韓国に残し、お姉さんとぼくだけを海外に送ったんです。」と社会問題としての側面を含めて語るのである。Eの場合も、「E. 経済的な理由が大きかったと聞いています。お父さんは、労働の仕事をしていて、二人とも地方からソウルに出て、労働の仕事がなくて、お金がない時に妊娠して、しかも双子だったので、その時かかっていた病院で、育てるのが大変ならば外国に送れると聞いたことがきっかけに、周囲からも、隣近所、社会福祉の人からの圧力もあったそうです。我が国の養子の歴史において、貧困家族は、養子制度の犠牲者だと思います。」と言う。

これらの語りは、先に述べた通り自己を手放した実父母の行為への「許し」に近い共感や同情の感情が窺われ、親としての責務の放棄さえ許そうという葛藤を知ることができる。その点で、「なぜ捨てられたのか」

の回答を合理化する「認知的な意味世界」という面で見ると、共通した説明を認めることができる。しかも、「規範としての意味世界」である親のあるべき姿という道徳観も、この実母に対する「共感や同情、憐憫」によって「許し」の語りとなっている。その点では、「認知的な意味世界」と「規範的な意味世界」が統合されている姿が見られるのである。インタビューした5人の年齢（30-40歳）や、海外養子の特殊なアイデンティティのあり方によるものと思われる。実父母への「許し」の行為は、彼ら・彼女らの人生に再び意味を与えることを可能にすると思われる。

### C インタビューの分析

ここでは5人のインタビューから理解できた点をまとめておきたい。当初の訪韓目的が「ルーツ探し」と韓国への好奇心や興味・関心であったこと、そして当初は長期に滞在することは考えておらず、生育国に帰る気持ちが強かったが次第に変化していったこと。また、実母（家族）との再会は、海外養子たちのアイデンティティ葛藤の大きな転機となっていることが明らかとなった。以下、論点を絞ってインタビューから見えてきた点を分析的に示しておきたい。

#### ① 実母（家族）との再会

Dは、次のように語った。「最初は、スイスにいる時は、自分がどこの誰なのかわかりませんでした。自分は韓国の道で発見されたし、そういう自分が何者かも知らなかったけれど、いまは完成された感じ。どんな家庭で生まれ、自分は、何者かを知り、自分が完成されたような気分は、例えるとパズルのようなもので、最後までパチッとパズルがはめられて完成された感じです。」と実母との再会を振り返る。自己の人生の空白を埋める作業としての「実母との再会」の意味がある。

実母の自分を手放した理由に対しては、合理的理由があると理解し、自分でも納得できる説明として受け入れる傾向にあった。その結果、「捨てられた」という自己の境遇を、母親としての「実母の責任」以外のところに見いだそうとする。その際に見いだすためのキーワードが、韓国社会のジェンダーバイアスや家父長制家族の問題、韓国土俗信仰の非合理的問題、経済的貧困の問題、そしてそれを取り巻く韓国社会や政治の棄民政策の問題性であり、それらに結合されていく。このような政治、社会、風俗と結合した合理的な説明（「認知的な意味世界」）により、「規範的な意味世界」

の問題とも調和していくように思われる。その点を証明するように、彼ら・彼女らは実母を許し共感し、再会後も実母との関係を継続させている点があげられる。

## ② 韓国での社会生活・韓国人との接触体験

帰還することによって韓国的一部分として存在することが可能となったが、韓国人の海外養子に対する認識が薄いこと、海外養子としての自分の存在を否定する発言に出会うことに苦悩している。つまり、そこには疎外される存在として生育国で成長したが、それが韓国に帰還しても認められない現実に直面する。その意味では、育った国でも疎外感を持ち、また韓国でも疎外感を感じるという、いわば二重の疎外感を体験する現実があったことが分かった。

なお韓国に帰還することによって、養父母との関係が変化するケースもある。CとDは、韓国に帰還することに対して養父母はあまり賛成しなかったと語っている。押し切って帰還した二人は、その後にも養親との関係が断絶してしまう状況にあった。失った母国の実母を探す旅で、自分が育った国の養父母を失う結果になる。すなわち実父母からの断絶から養父母の断絶へ向かうケースもある。帰還が、こうした事態を生み出すことも指摘できる。

## ③ 言語の問題

言語（韓国語）の問題は、彼ら・彼女らに疎外感を強く感じさせている。韓国に戻っても海外養子に対する無理解や、認知されにくい存在としての現実は、この言語の問題がとて大きく影響している。

## ④ アイデンティティの変容－「組織的活動」型と「個人的ネットワーク」型

5人のインタビューによって、二つの韓国社会へ向き合う意識の傾向が抽出される。養子問題解決のための市民的活動団体を組織したり、中心的役割を果たすBとCのような、いわば【組織的活動】型と、それに対してA、D、Eのような養子問題に関心を示しながらも韓国の良さを認識したり、生活する価値を模索する【個人的ネットワーク】型の二つが存在していることが指摘できる。前者のBは、ソウル大学の公共政策科の大学院に進学し、「実は、私、公共政策については余り関心がないけれど（少し笑い）、一つのイシューについて…それは、韓国の養子問題と未婚母問題について、社会政策的に、私たちの目的を叶えるため」と言い、「この現実の社会に対して、闘っていきたくい

す。ぶつかりながら変化させていきたいです。」と強い意志を示している。Cも、ソウル大学で韓国社会福祉学を学び始め、韓国の福祉サービス問題に関心を示す。帰還した母国の現実に限界を感じ、変革しながら影響を与えていこうという彼らであり、活動組織を通してアイデンティティを強調するタイプである。

「個人的ネットワーク」型は、韓国社会に孤立ではなく、ネットワークに参加しながら個人的に自立、適応していくタイプである。韓国人の友人作りや韓国文化の修得に努力したり、また自己の言語（仏語・英語）をレッスンを通じて韓国人に広めていく活動に、アイデンティティを見いだそうとする。Aは、「自分が納得いく理由だったらここで暮らしてもいいと思っています。」、Dも「幸せになること。一カ所ではなく、スイスと韓国とを行き来しながら二カ所で暮らす方がいいな、と思います。」、Eは、「ずっと韓国で暮らしたい。いまは韓国の芸術ジャンルの小さい表現等に関心がある」と韓国への関心を示している。5人の中からは、こうしたアイデンティティの模索の姿を知ることが出来た。

## おわりに

自己のアイデンティティの葛藤のために帰還した海外養子たちが、反対に、より自己のアイデンティティを不安定なものにさせていく場合も多い。そのことも含め、インタビューを通して、多様なアイデンティティの変容の過程があることを明らかにすることができた。

海外養子たちのアイデンティティは、韓国社会との接触や実母との再会という体験、つまり自己と他者との新たな調整が求められる場面であった。他者との出会いが、あまりにもインパクトがあり、自己との調整が容易でないケースも想像できる。それでも、滞在期間が長期になることによって、その調整を進めてきた様子も窺うことができた。

筆者は、本稿で得られた知見が、多少なりとも韓国の海外養子を巡る社会や政治状況が改善されることに役立てばとの思いである。インタビューの内容を知れば、彼ら・彼女らの抱える心の葛藤が聞こえてくるように思える。そして提起された問題と向き合うことによって、歴史的にも社会的にも隠蔽されてきた海外養子たちが、韓国人として社会の中で受容されていくと思う。

また、このプロセスが、彼ら・彼女らのアイデンティティの調和にもつながり、しかも自分の人生を再

構築する契機となる場合もあろう。なお、その際には言語の問題は大きい。帰還した海外養子たちの大部分は、韓国語が話せないために言語の壁にぶつかり、韓国社会から疎外感を感じる傾向にある。そのための言語教育プログラムの配慮と強化が必要であり、韓国人との意思疎通が図れる工夫が求められている。帰還した海外養子たちは、長期に滞在する場合は韓国人との交流をはじめ、仕事も見つけないとの希望を持つ者も少なくないからである。

その意味で、帰還した海外養子たちと韓国社会との媒体となる教育プログラムの改善・強化が求められる現状である。これらについての具体的分析と提言は、今後の課題としたい。

## 注

- 1) Kim Su Rasmusen 「THE KOREAN ADOPTION SYNDROME」(제4회 입양의 날 기념, 이산과 귀환의 틈새 Dispersed and Returned, pp.68-69, 2009年5月7日-5月12日)。
- 2) 韓国では毎年5月10日を「養子の日」として定めたり、各海外養子斡旋機関が事後訪韓プログラムを主宰している。人道主義的な立場から弱者への恩恵付与という発想も強いとの指摘がある。
- 3) 坂井菜央美「韓国海外養子研究の動向と教育学的課題」東京大学教育学研究科生涯学習基盤経営コース『生涯学習基盤経営研究』第35号, 2010年度。
- 4) コ・ヘヨン, イム・ヨンシク「海外養子の心理社会適用」『未来青少年学会誌』vol.,2, no2, 2005, pp5-16。  
なおこの論文では、「海外養子たちの民族アイデンティティが高いことは、自身が養子に出された国家と社会の中でも帰属感を感じることができないために、その孤立感を解消してアイデンティティを探そうという努力を多くする。」と結論づけるが、帰属感が持てないことに対しては、もう少し慎重に検討していく必要がある。
- 5) 吉原智恵子「社会的文脈における自己概念の変容と動機づけ」下斗苦淳他編『自己心理学⑥社会心理学へのアプローチ』金子書房, 2008年, pp128-129。
- 6) 大倉得史『「語り合い」のアイデンティティ心理学』京都大学学術出版会, 2003年, pp.5-6。
- 7) 西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会, 1993年, pp.117-118。なお関連して, E, H, エリクソン(西平直ほか訳)『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房2011年, を参照した。
- 8) 同上。
- 9) 西平前掲書, p.120。
- 10) 朝鮮戦争休戦直後の1950年代中盤からであり, 当初, 駐留米兵と韓国女性との間に生まれた子どもが海外養子の対象であった。1960年代以降には, 韓国社会の経済的貧困に起因する韓国人の子どもたちが, 1970年代以降は経済成長の歪みのもとで, そして現在は若い未婚女性の出産など, 時代の社会, 経済状況を反映している。各段階の政治的な決断が, この海外養子問題の背景にあった。
- 11) 細見和之『アイデンティティ／他者性』岩波書店, 1999年, pp.2-4。
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 현덕 김 스코글룬드 육음 『아름다운 인연-스웨덴이 기른 우리 아이들』 사람과책, 2009年, pp220-222。
- 15) 筆者が実施した質問紙調査でも, 韓国滞在の海外養子たちへのアイデンティティについて, 回答者の内, 混乱体験が「ある」(52.6%)と「少しはある」(19.2%)の合計が71.8%に達していた。併せて混乱した時期に関しては, 複数段階としたものが33.3%となっている。長期にわたりアイデンティティの混乱体験が継続してきたことを示唆している。(拙稿「韓国に帰還した海外養子たちのアイデンティティと教育支援」, 前掲『生涯学習基盤経営研究』第37号, 2012年度。
- 16) 野辺陽子「実親の存在をめぐる養子のアイデンティティ管理」『関東社会学論集』第24号, 2011年, pp168-179。
- 17) 実施場所は, 「プリエチブ」(根っこの家。ソウル市鐘路区 <http://www.koroot.org/index.asp>, 2013.9.10) という, 一時帰還した海外養子たちを支援するNGOの宿泊施設, 5人は, そこに滞在または関係を持っている人々である。個別または集団の中で実施した。インタビューは, 半構造化面接で, トランスクリプトを, 大谷尚のSCAPの方法を用いて分析した上で要約した。(大谷「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCATの提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第54巻2号, 2007年)。  
(指導教員 牧野篤教授)